

# 初期アメリカ英語書簡における *I think, I know, I hope* の用法\*

福 永 眞理子

## 1. はじめに

認識を表す動詞の一人称単数主語現在形には、(1) の *I believe* のように文末や文中に用いられた場合、主節 *There is a God* に対して話し手・書き手の態度を示す。

(1) *There is a God, I believe.* [‘There may be a God.’]

(Quirk et al. 1985: 1113, [4], 強調原文のまま)

こういった機能をもつ表現形を Quirk et al. (1985) では comment clause と呼び、歴史的には Chaucer 作品の *I guess* にみられることが Brinton (1996) によって確認されている。本稿では、1630 年にニューイングランドに移住したマサチューセッツ湾岸植民地初代総督 John Winthrop the Elder (JW; 1588-1649) とその男系子孫や交信相手の書簡における用法を概観し、*I think, I know, I hope* を中心に世代別の違いを考察する。

## 2. 現代英語における comment clause と歴史的発達

一人称単数主語現在形の形式をもつ comment clause タイプ (以降、*I+V* と表記) は、Quirk et al. (1985: 1112-1115) によると、最も重要なタイプに属し、統語的には文章要素に含まれず文頭・文中・文末のどの位置にも現れ、話し手・書き手の “tentativeness (=hedge)”, “certainty”, “emotional attitude” を表す。形式的には、*that* 補文節をとる (2) のような主節 *I believe* と類似しているが意味的には互換性がなく、主節と従属節の役割が逆転するという。

(2) *I believe that* there is a God. [‘I assert the belief that there is a God’ or ‘there may be a God.’]

(Quirk et al. 1985: 1113, [3], 強調原文のまま)

---

\* 本稿は、京大英文学会 2022 年度年次大会での口頭発表についてのコメントを参考に加筆・修正したものである。本稿原稿にコメントをくださった査読の先生方に感謝申し上げます。

文頭に用いられた *I+V* は、カンマ区切りがなければ主節との区別が容易ではない。Kaltenböck (2010: 241) は、文中や文末に用いられる *I+V* は常に “parenthetical” であるのに対し、*that* が省略された文頭例 — ***I think*** (*that*) *John is in London* は、主節なのか comment clause なのか、あるいは両方の解釈が可能なのかの見解が研究者によって異なる、と指摘している。

Thompson and Mulac (1991) によると、生起頻度の高い動詞 *think* や *guess* では *that* よりも *that* を用いず接続する (0-*that*) 頻度が高くなることから、話者の再分析によって認識の意味 (副詞 ‘maybe’ と同等の意味) と解釈され、文中・文末にも用いられるようになるという<sup>1)</sup>。つまり、意味変化は *that* より 0-*that* が多くなる時点に起こる。

しかしながら、この仮説は歴史的には必ずしも当てはまらない。0-*that* 構文は 17 世紀に増加することが Rissanen (1991) による高頻度動詞 (*say, tell, know, think*) の調査によって実証されているが、それよりも早い Chaucer 作品の *I guess* に comment clause の用法がみられ、既に *that*, 0-*that* よりも頻度が多いことが示されているからだ (cf. Brinton 1996: 248)。Brinton (2008: 248) では、副詞類接続詞 (*as* 等) と共起する形式を統語ソースとして提案し、動詞によって発達経路や時期が異なる点を示している。

Comment clause は 15 世紀の書簡においても田辺 (2010) によって確認されている。田辺 (2010: 90-91) と 17~18 世紀ウィンスロップ家書簡とを比較検討した結果、*I believe, I doubt, I hope, I know, I suppose, I think, I trust, I understand* に挿入用法が増えていることが判明している (福永 2022)。18 世紀の comment clause はさらに主観性が高まり、読み手との関係構築の手段に用いられていたことが Yamamoto (2010) によって証明されている<sup>2)</sup>。

本稿では、発達過程にある初期アメリカ英語における comment clause について、書き手の用法に焦点をあて考察する。次節で分析方法を述べ、第 4 節で男女別、地域別、世代別に挿入用法の概観を示した後、第 5 節にてウィンスロップ家の書き手を中心に

1) Thompson and Mulac (1991) では comment clause を epistemic parenthetical と呼び、*that* なしで後続文に接続する *I think* を epistemic phrase と呼んでいる。

2) Yamamoto (2010: 380-381) は、Quirk et al. (1985: 1112-1118) の分類に準じ、18 世紀雑誌 *Spectator* に生起する全ての comment clause を抽出、下記の形式別に分類し量的・質的に調査している: Type 1 (a)-(d) (e.g. *I think, I believe, I hope, you know*); as 付を Type 2 (*as you say, as I can see, as you may remember*); それ以外を Type 3 (*to be brief, to speak the truth, to be short, speaking generally, for my (own) part, in my opinion, etc.*)。さらに、主観については “in the degree of subjectivity not all comment clauses are the same: Type 1, which is the most frequent, can carry stronger subjectivity than Type 3” (Yamamoto 2010: 393) と述べているが、この Type 1 には *you know* が含まれている。

高頻度の *I think, I know, I hope* の用法を検討し、第6節でまとめを述べる。

### 3. 分析方法と調査範囲

本稿調査には、最新版の Corpus of the Winthrop Family Correspondence (CWC; 572,120 words) を用いた<sup>3)</sup>。一次資料は主に Massachusetts Historical Society (MHS) 出版本に収録されている John Winthrop (JW; 1588-1649) と男系子孫及び通信相手の原稿・断片を含む 1,363 通 (1616~1779 年) から得た。Prof. JW の書簡は *Philosophical Transactions* (RS) などからも収集した。書き手と宛先 (読み手) の出身地・生没年や続き柄及び背景情報は一次資料の注釈や Mayo (1948) を主に参照し、日付のない書簡は *Winthrop Family Papers* のウェブサイトも確認した<sup>4)</sup>。

対象用例は、コンコーダンサーを用いて CWC より抽出した一人称単数主語 *I* を含む用例の中から、先行研究により comment clause の用法が確認されている動詞の現在形 33 タイプと類義語 2 タイプ (*apprehend, perceive*) を手作業で抽出し、合計 2,884 例を得た<sup>5)</sup>。(3a-c) は Quirk et al. (1985: 1114) のタイプ (i) (a)~(c) より抜粋した。

#### (3) 調査対象

##### (a) Tentativeness (hedge)

*I think, I suppose, I believe, I consider, I expect, I feel, I guess, I hear, I presume, I suspect, I understand*

##### (b) Certainty

*I agree, I am sure, I know, I remember, I see*

##### (c) Emotional attitude

*I am afraid, I fear, I hope, I wish*

##### (d) Others

*I apprehend, I assure (you/thee/myself), I conceive, I conclude, I confess, I doubt, I fancy, I find, I imagine, I mean, I perceive, I reckon, I rejoice, I suggest, I trust*

3) 初期の約 32 万語 (cf. Fukunaga 2020) に通信相手の書簡やウインスロップ一族のフォーマル度の高い書簡、18 世紀書簡 (特に Prof. JW の書簡) を追加した。書き手は約 110 名だが、総語数の約 65% がウインスロップ一族による。ウインスロップ家は、JW の祖父 Adam Winthrop (1498-1562) の時代に織物業で財を成し、イングランドの East Anglia, Suffolk 州の Groton 荘園を購入、gentleman や Esquire の称号で呼ばれている家系である (cf. Robert Charles Winthrop 1864)。

4) *Winthrop Family Papers* (Vols. 1-4) は <https://www.masshist.org/publications/winthrop/> を参照。

5) コンコーダンサーは下記サイトより入手可能な Laurence Anthony 教授によるソフトウェア *AntConc* (3.5.9 版) を用いた。 <https://www.laurenceanthony.net/software/antcon/>

次に、2,884 例を (4a) *that* 補文節, (4b) *that* を用いず接続する 0-*that*, (4c) *parenthetical constructions* (*par.*), (4d) *Other complementation* (*Other comp.*) に分類した。発達過程に現れる構文を (4a-c) と仮定した。[下線は補文節を示す]

- (4) a. [*that* 補文節]: e.g. **I** hear that it is all soccage tenure (except 40 acres); ...  
 b. [0-*that*]: **I** percieve my last weekes Lettre was not come to your hands  
 c. [*par.*]: which (**I** thinke) will make him in the ende to parcell it out,  
 d. [*Other comp.*]: though **I** doubt not but since it is,  
 (JW to no name (brother-in-law); November 11, 1623; RCW1864: 201)<sup>6)</sup>

*Parenthetical constructions* には、田辺 (2010) と Brinton (1996) を参考に接続詞 (*and, but, yet* 等), 副詞 (*however, therefore, then* 等), 呼びかけ語 (e.g. *sir*) の後に用いられ別の文が後続する例を含めた<sup>7)</sup>。また、*if* 節と帰結節などの二つの節の間に現れる例も *parenthetical constructions* に含めた。*Other complementation* には名詞 (句), *to* 不定詞や *wh* 節など, *that*/0-*that*/*par.* 以外のすべてを分類した。*Comment clause* の発達は, *that*, 0-*that* と *parenthetical constructions* の比率によって検討する。以下, *parenthetical constructions* の用法を挿入用法と呼ぶ。

CWC の挿入用法は, 接続詞の直後の文頭や関係詞内の文中に最も頻繁に現れる。上述 (4a-d) は, (5) に示す JW の 1623 年書簡からの抜粋である。抽出した節を太字で示している。前半には, 送ったはずの「先週の書簡」が読まれていないことが判明していると告げ, 近況報告が続く。0-*that* に分類した *I perceive* は文脈上省略すると齟齬がおきるため主節であると考えられるが形式的には判定ができない。次の *other complementation* に分類した *I doubt not* は *but* 以下から切り離されて *comment clause* に発達する可能性は低いと考えられる<sup>8)</sup>。*If* 節の後, 帰結節の直前の *I think* は統語上省略可能であり, 義兄弟宛へのネガティブな告知の印象を和らげる働きをもつ挿入用法と考えられる。太字波線以降の後半は土地売買に関する報告であり, 接続詞や *wh* 関係代名詞によって補足情報が追記されていく。*I think* や *I suppose* はそれら関係詞節に括

6) 出典は順に「著者略称 to 宛名; 書簡の日付 (もしくは受領署名日); 編者/出版社略+出版年: 頁」で示す。RCW は Robert C. Winthrop の略。以降の用例は, 原文の long s は現代綴字に, fro~などの省略記号は from もしくは fro[m] に, w<sup>ch</sup>などの上付きは使わず表記, 混同する o<sup>o</sup>は our に復元した。また, 用例中の太字・下線の強調は注記しない限り福永によるもの。

7) 田辺 (2010) は, Brinton (1996) に倣って *I* と動詞の間に助動詞や副詞の介在する例を含めているが本稿では除外した。

8) 丸括弧付の下記 1 例は挿入用法に分類した。[...] *and (I doubt not but)* the Court will be very ready to pass them by, and accept of your submission; (JW to William Coddington and others; January (XIth) 15, 1637[-8]; RCW1895: 215)

弧やカンマ区切りで挿入され、*wh* 節の情報に対して断定を避ける役割を果たしている。一方、*that* 補文節をとる *I hear* は主節の役割を持つ。

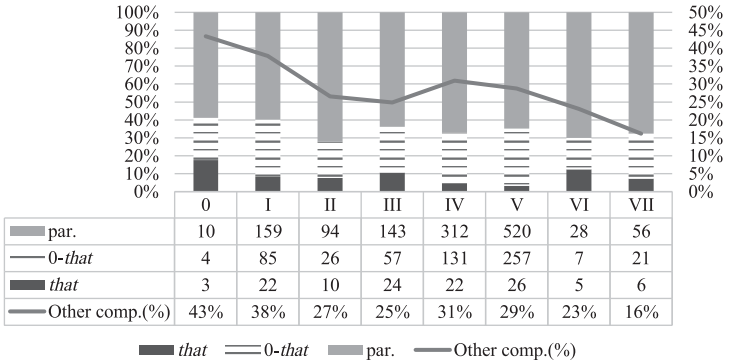
- (5) My Good Brother, —**I percieve** my last weekes Lettre was not come to your hands when yours was written, though **I doubt** not but since it is, & therefore I will spare to write of any thinge in that: my mother (I prayse God) is well recovered &, remembers hir love to you & to my good sister, & so dothe my wife, & we all are gladd of the continuance of your health & of all yours. If my Brother Downinge goe for Irelande soe suddainly, **I thinke** I shall not see you this winter. I have assigned Haxall 2 trees which stande in the ditche waye between Mr. Brande & you; [中略], so as I have a purpose to meet Mr. Brande there one day & have it viewed & agreed upon. **I wrote you in my last that Peyton Hall wilbe sould**: it is now offered to any that will buye it; the rent is 300lb per ann. & his price is 6000lb: but he must come downe a gret deal if he will sell together, which (**I thinke**) will make him in the ende to parcell it out, which yet he is not willing to doe: **I heare** that it is all soccage tenure (except 40 acres); it is good land but very bare of wood & no royalty or other advantage belonging to it, nor any building, & farre from churchy which defects, **I suppose**, will discourage any great purchase & Sir David must needs sell, and that speedilye. [...] (JW to no name (brother-in-law); November 11, 1623; RCW1864: 201)

関係詞節内への挿入用法の起源について、Brinton (2008: 229-230) は、名詞要素が前置された「名詞 (先行詞)–関係詞–動詞」の語順が「名詞 (先行詞)–関係詞–*I+V*–動詞」へと発達した可能性を初期近代英語の例で示している。関係詞節への挿入は、Chaucer 作品や 15 世紀パストン家の書簡にみられることを田辺 (2010: 87-89) が指摘している。本稿では、こうした挿入用法の現れる言語環境や位置について *I think, I know, I hope* を中心に観察し、世代別の違いを検討する。

#### 4. 挿入用法の概観

挿入用法の発達について、期間 0 (~1619 年) と VII (1740~1779 年) を除き 20 年単位で *that*, 0-*that*, 挿入用法 (par.) の百分率で図 1 の棒グラフに示す<sup>9)</sup>。*That* はどの期間も最も少なく、挿入用法は 59~72% の高い比率で推移している。本稿の議論には含めないが、other complementation は、折れ線グラフに示すとおり減少傾向にある。

9) 書簡の少ない 1619 年以前と 1740 年以降を除き、20 年単位にした: 0=1616-1619; I=1620-1639; II=1640-1659; III=1660-1679; IV=1680-1699; V=1700-1719; VI=1720-1739; VII=1740-1779



[Other comp.(%) = Other comp. / (that + 0-that + par. + Other comp.)]

図1 CWC 期間別構文分布

書き手グループ（ウインスロップ家，女性，ダドリー家，Old Englanders，Other writers）別の構文分布を表1に示す<sup>10</sup>。That を用いるのはどのグループもわずか5～7%しかなく，0-that は that よりも高い比率で用いられている。さらに，挿入用法は that/0-that 構文よりも高い比率を示し，17～18世紀に好んで用いられていたことがわかる。

表1 CWC 書き手グループ別構文分布

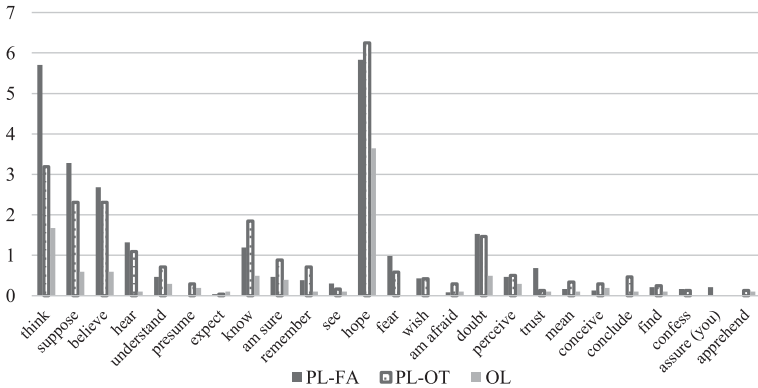
Sub-corpus	that	0-that	par.	that+0-that+par.	Other comp.
Winthrop (male)	70 (5%)	369 (28%)	869 (67%)	1308 (100%)	574
Female writers	5 (7%)	26 (38%)	37 (54%)	68 (100%)	37
Dudley (male)	6 (6%)	27 (28%)	64 (66%)	97 (100%)	32
Old Englanders	11 (6%)	66 (38%)	98 (56%)	175 (100%)	71
Other writers	26 (7%)	100 (26%)	254 (67%)	380 (100%)	142
Total	118 (6%)	588 (29%)	1322 (65%)	2028 (100%)	856

挿入用法は，New Englanders 男性（ウインスロップ家，ダドリー家）が66～67%と，女性（54%）と Old Englanders（56%）よりも高い比率を示す。しかし，1万語あたりの出現頻度では，ウインスロップ家男性は24と，他グループ（女性27，ダドリー家男性29，Old Englanders 28）に比べ低く，動詞や書簡の種類が多様さが影響してい

10) 1640年以降に書かれた書簡の内，生誕地と居住地がイングランドの人物10名を Old Englanders とした。従って，Other writers にはイングランド在住者の1639年以前の書簡も含まれている。

る可能性がある。

図2に宛先別(PL-FA=家族・親戚個人宛, PL-OT=それ以外の個人宛, OL=個人宛以外)の1万語あたり生起頻度を示す。(3a)“Tentativeness”に関する *I think, I suppose, I believe, I hear* は近い相手に, (3b)“Certainty”に関する *I know, I am sure, I remember* は離れた関係により多く用いられている。請願書や委任状, 遺書などが含まれるOLは個人宛に比べて挿入用法の頻度が低い。感情を表す(3c)やその他の動詞群(3d)は動詞ごとに傾向が異なるが, 比較的頻度の高い *I fear, I wish, I doubt (not)* は個人宛により多く用いられる傾向を示す。



[挿入用法0もしくは1例の動詞及び other complementation のみ生起する *agree* を除く]

図2 挿入用法の宛先タイプ別1万語あたり頻度比較

表2は, コーパスサイズが約1万語以上の書き手及び Old Englanders とそれ以外の書き手の構文別分布を示している。孫世代の Fitz-JW 以降がアメリカ生まれである。

挿入用法は, Margaret 及び生起頻度総和7例以下の Old Englanders を除くすべての書き手に好んで用いられ, ウィンスロップ家では最も若い世代の Prof. JW と孫の Fitz-JW が高い比率を示す。全体的には New Englanders (65%) の方が Old Englanders (56%) よりも挿入用法を選択する傾向にあるが後者は個人差がある。

1万語あたりの頻度比較では, Wait に次いで Samuel と Margaret に挿入用法が多い。Samuel と Margaret のコーパスは家族・親戚個人宛書簡(PL-FA)に限定され, Wait は PL-FA の比率が高い。同世代では政府関連書簡の多い New Englanders の Fitz-JW, Joseph Dudley と Sir Edmond Andros (ニューヨーク総督として一時期着任)や Sir Henry Ashurst (マサチューセッツ湾岸植民地の代理人)が同程度を示す。しかし, 必ずしも書簡タイプや世代が影響しているともいえないケースがある。John Chamberlayne (デンマーク皇太子侍従紳士も担った作家)は10歳以上若い JW FRS よりも多い。

表2 書き手別構文分布

Born-Died	No. of letters	No. of Words	書簡 Time-periods	JWとの続柄	Writers	生起頻度				挿入用法		Other comp.
						that	0-that	par.	Total	per 10,000	(%)	
1588-1649	152	66,540	0-II	本人	JW	13	55	105	173	16	61%	107
1606-1676	115	59,180	I-III	長男	JW Jr	19	30	110	159	19	69%	65
1627-c. 1674	24	10,080	II-III	息子	Samuel	5	17	26	48	26	54%	15
1638-1707	190	71,690	III-V	孫	Fitz-JW	10	34	152	196	21	78%	97
1642-1717	268	103,020	II-V	孫	Wait	12	199	352	563	34	63%	248
1681-1747	21	14,020	V-VI	曾孫	JW FRS	2	9	23	34	16	68%	11
1714-1779	21	27,060	VII	玄孫	Prof. JW	5	13	45	63	17	71%	11
1647-1720	70	19,010	III-V	(*1)	J. Dudley	4	20	40	64	21	63%	28
c. 1591-1647	28	9,560	I-II	妻	Margaret	4	25	25	54	26	46%	28
	889	380,160		New Englanders		74	402	878	1,354	23	65%	610
??-??	4	530	III-IV	Edward Randolph		1	0	0	1		0%	0
1608-1670	1	190	II	George Monck (*2)		1	0	0	1		0%	0
c. 1668-1723	16	6,770	V	John Chamberlayne		3	7	25	35	37	71%	12
??-??	2	640	IV	Nathaniel Milner		0	1	0	1		0%	2
??-??	1	680	V	Richard Lechmere		0	4	3	7		43%	1
1646-1717	4	1,590	V	Samuel Reade		0	2	1	3		33%	1
1637-1714	20	3,880	IV	Sir Edmund Andros		1	2	9	12	23	75%	7
1645-1711	57	24,340	IV-V	Sir Henry Ashurst		5	50	56	111	23	50%	43
1644-1718	1	190	V	William Penn		0	0	2	2		100%	2
1640-1713	1	770	V	Wolfgang Romer		0	0	2	2		100%	3
	107	39,580		Old Englanders		11	66	98	175	25	56%	71
	367	155,380	I-VII	Others		33	120	346	499	22	69%	175
Grand total	1,363	575,120		Grand total		118	588	1,322	2,028	23	65%	856

備考：(\*1) JW FRSの妻 Anneの父、Fitz-JWとWaitとの書簡は政府関係の交信が大半を占める。

(\*2) George Monck名の任命状3通はOthersに集計した。

書簡分量の多いウインスロップ家男性の用いる動詞は27種類と最も多く、女性は10種類 (*hope, think, am sure, fear, know, trust, confess, hear, see, understand*) のみ、グループ共通は *hope, think, know, am sure, see* に限定され、女性は1例のみ生起する *I see* を除くと、一万語あたり頻度では男性よりも *I think, I am sure* を多く用いる傾向にある。Margaret, SamuelやWaitの書簡には文末用法も見られ、次節で例示する。

## 5. 17世紀の挿入用法

### 5.1 *I think*

New Englandersの *I think* の頻度を書き手別に表3に示す。宛先別では、JW, JW



表3 挿入用法の生起頻度 (宛先別, 位置別)

<i>I think</i>	JW	JW Jr.	Samuel	Fitz-JW	Wait	JW FRS	Prof. JW	J. Dudley	Margaret
PL-FA	10	17	5	6	72	3	—	0	10
PL-OT	1	6	—	10	9	1	0	3	—
OL	0	0	—	5	3	2	7	0	—
Total	11	23	5	21	84	6	7	3	10
initial	6	8	4	8	30	3	2	2	7
medial	5	15	0	13	47	3	5	1	3
final	0	0	1	0	7	0	0	0	0

[「—」は対象書簡がないことを示す]

Jr. Wait, JW FRS の分布が示すとおり, 近い関係により多く用いられる傾向にある。位置的变化として, 文末用法が JW の息子 Samuel と孫の Wait にみられる。

*I think* の挿入用法は, 共通して (6b) のような *wh* 関係詞節内と (6c-d) のような接続詞直後に多くみられ, 「考えを記述する」というよりは「私の考えだが」というコメントを表す。

- (6) a. Commende my love to my good servant, & tell her, **I think** I must be forced to write to her this weeke; (JW to Margaret; November 12, 1629; RCW1864: 357)
- b. Here was an anvil, with a beak horn at the end of it, which **I think** was carried to Cont. If it be, I pray send it back, for it is challenged. (JW to JW Jr.; June 10, 1636; RCW1895: 156)
- c. What he will do, I know not yet; but **I think** he will be with you soon. (JW to JW Jr.; October 9, 1629; RCW1864: 335)
- d. For yor owne debt, I suppose you intended me a Courtesye in offeringe to accept a heifer for yor 2 Calves & 4li & accordingly I desired Mr. Carlton to choose one for you: & **I think** if you value your Calves viz: a Bull & Cow calf of a weeke old at 5; or 6li (wh is the most they can be worth) & my heifer (as I sould her fellowes before winter) at 13li, you will finde yorselpe mystaken, but that is a small matter between yorselpe & me. (JW to Rev. Ezekiel Rogers; draft [1639?]; RCW1895: 420)

(6a) は妻に伝言を依頼する命令文 *tell her* の内容として「JW 自身の手紙を書く予定」について, (6b) は息子のいるコネティカットにあるはずの「anvil のありか」について断定を避ける機能を示す。託送人の予定に合わせて書く習慣の当時であれば, (6a) の読み手は *I think* によって「予定の不確実性」を想起したはずだ。また, 息子宛ての (6c) では, 下線部で「わからない」と断言した後に *I think* が用いられており, 以下

の予定情報が「不確か」であると読み手には伝わるはずである。(6d)は、JWが“loving letter”の受領確認をした相手であるため、好意的な態度で書かれていると考えられる。1639年当時JWは委託していたイングランドの土地管理人による不正があったことを知ることにになり、この書簡は、本件に関連した親切な申し出に対する返信であることから、「意見を述べる」というよりは*if*条件節と共に主張を和らげる機能を果たしている。

*I think*の「不確かさ」の意味は文脈によって生み出されるが、直後の語句を修飾しているかのような働きもある。息子JW Jr.の挿入用法には、(7b-c)のように前置詞句や名詞句の直前に用いる例がある。(7a-b)はひと続きの文章で、人物説明をしている文脈で「*one*+人物名」の後に*I think*を挿入している。(7a)は「Mr. Peakeという人物」の先に伝えたい*he is*の補語*an woollen draper*が前置され*I think he is*と続く。(7a-c)の*I think*はそれぞれの下線部にかかっている。

- (7) a. There is one Mr. Peake (an woollen draper, **I think** he is),  
 b. and Mr Woolnock, a linin draper, in Grace Church street; Mr Robert Brooke, in Crooked Friers, and one Mr Mannaring, **I think** about Ludgate Hill, yt are dealers for this country, as many others, of whom I suppose Mr Hooke can informe you. (JW Jr. to no name [kinsman]; September 19, 1660; MHS1882: 67)  
 c. They write also fro[m] Boston yt one Mr Woodbury, master of a Salem vessell, taken by a Duch ship, is come passenger (**I think** in the Jamaica ship) having made an escape fro[m] the Duchma[n], and who reports that the capt. of yt Duch ship told him of the fire, but they write nothing of any p[ar]ticulars by him related about it. (JW Jr. to Richard Nicolls; March 6, 1666[-7]; MHS1882: 116)

CWC初の文末用例はJWの息子Samuelにみられる。生年はJW Jr.よりは孫世代のFitz-JWに近い。長兄JW Jr.に許可を得た土地の話について、「会うまで煩わせたくない」と述べ、さらに会う時期を述べた後に*I think*を付け足している。長兄に対して「今年は無理」というような否定的な情報についてそっけなさを緩和しているかのようである。

- (8) It is true I did write to him to desire him by some sorte of waye to inquire if you had any disposicon to part wth it, in regard I thought ye conueniency of it might suit well wth mee, & I desired to haue it before another; & since you are pleased to giue me a graunt of it, I shall not trouble you farther herein vntill I see you, wch canot be this year. **I think**. (Samuel to his half-brother JW Jr.; March 26, 1660; MHS1882: 248)

Margaret の書簡のほとんどは夫 JW 宛てである。文頭に用いることが多いが、(9a) のような目的語の関係詞節内に生起する例が2例と(9b)の例(主語と動詞の間に生起)が1例ある。(9a)は主節文の要素が前置する点で(7a)のCSV語順に類似している。

- (9) a. But I think hir desyre is that she may confir with you about Mr. P. whom **I think** she will scarce have power to deny. (Margaret to JW; [November 17, 1629]; RCW1864: 358)
- b. My daughter, Mary, **I think** liked hir coote well. I am shure I did and thanke you for it. (Margaret to JW Jr.'s 1st wife Martha; [April 20, 1631]; RCW1895: 76)

Fitz-JW の書簡の大半は、コネティカット総督時代に書かれたものである。関係詞 *what* や *such . . . as . . .* に生起する変種がみられる。(10a)のように主節動詞の直後に丸括弧で挿入し、主節全体の情報がFitz-JW 自身の見立てであることを示す。(10b)は文頭に提示した話題について *since* 以下に根拠が示されているため、「不確かさ」というよりも *need not much affright us* を強調しているかのようである。

- (10) a. The late Duke of Albemarle had (**I think**) by his comission some superintendency ouer all the governmts in the West Indies, and I beleiuie the Earle of Bellomont will goe over, under as great circumstances; but hope noe ill will affect Conecticot, their Majties letter promising to cotinue their rights & priuileges. (Fitz-JW to Wait; London, July 13, 1695; MHS1882: 324)
- b. The perticuler you haue incerted of Coll. Hamilton his purchase of my Lord Arrans right to his claim in these parte **I think** neede not much affright us, since the Lords of the Council of Trade have assured us that what motions are made in that matter shall be comunicated to us, and I doe not doubt of it. (Fitz-JW to Samuel Willis; New London, August 14, 1698; MHS1882: 350)

Wait の(11a)は、父 JW Jr. が1676年4月5日に亡くなった後に離れて暮らす兄に宛てたもので、(11b)はWait自身が亡くなる(1717年11月7日)直前に息子に宛てたものである。文末用法は近い相手(兄宛て6例、息子宛て1例)に生起する。

- (11) a. We are left as you know. What my father was pleased to doe with respect to his will was don, **I think**, but the day before he departed, by the desire of Mr Richards and some others. (Wait to Fitz-JW; Boston, May 15, 1676; MHS1882: 404-405)

b. Mary sends duty, love, and thanks for the nutts; she is now at scoole. All freinds well. Thay are to try pirates here tomorrow, **I think**. (Wait to JW FRS; October 22, 1717; 1892: 352)

Wait は JW Jr. が亡くなった日に別の人物に Fitz-JW宛ての知らせを託したが、自分自身が実際に手紙を書くことができたのは May 15 であると説明しており、(11a) の下線部に示す「父の遺志に関して父が喜ぶだろうことはした」と述べた後に、*I think, but ...* とそれが父が亡くなる直前に別の人の要請によってなされたという事実が追記されている。一方、約 40 年後の (11b) の文末用法は、第三者が予定する未来のイベントに対して付加し、断定を避けている。

## 5.2 *I know*

*I think* と共通して接続詞の後や *wh* 関係詞節内に生起する例が最も多いが、文末用法は *as* や *that* を伴った慣用表現に限定されている。

(12a) の *that* は前文を指し示す。文頭 9 例の内 7 例が<sup>8</sup> (12b-c) のように二人称主語

表 4 挿入用法の生起頻度 (宛先別, 位置別)

<i>I know</i>	JW	JW Jr.	Samuel	Fitz-JW	Wait	JW FRS	Prof. JW	J. Dudley	Margaret
PL-FA	12	0	3	1	5	0	—	0	1
PL-OT	3	5	—	11	6	1	1	2	—
OL	1	0	—	1	1	0	2	0	—
Total	16	5	3	13	12	1	3	2	1
initial	9	0	1	5	5	1	0	1	0
medial	5	5	1	8	3	0	1	1	1
final	2	0	1	0	4	0	2	0	0

[「—」は対象書簡がないことを示す]

の行為に対して確信を表し、文中 5 例は (12d) のように *wh* 関係詞や *as* など従属節内に用いられている。(12b-d) はいずれも「相手 (*you/thou*) の状況や行為を知っている」と述べているのではなく、読み手の立場に同調する役割を果たしている。

(12) a. [...] & I feare least this hath been a great cause of Gods withholdinge so much of his presence from us, since that Court hath dealt so frequently in judging private Causes, to which they have no ordinary callinge, **that I knowe**: for our Saviour teaches us, that everye man that shall exercise power of Judgmt over others, must be able to prove his callinge thereto. (JW to no name; October 14, 1642; RCW1895: 277)

- b. Thou mayest mervaille that thou haddest no Letter from me by my Sonne, but **I knowe** thou wilt not impute it to any decaye of love, or neglect of thee; [...] (JW to Margaret; June 5, 1629; RCW1864: 297)
- c. For mine owne pte, **I knowe** you have a most fatt & pleasant country, wch you will finde, when experience (wh ushally costs deare) teaches you to improve it in the right kind; [...] (JW to Rev. Thomas Hooker; draft [1638]; RCW1895: 421)
- d. [...]: He [=the Lord] hath shewed you great trobles & adversities, but he will returne & receive you, &c, to the ioye & strengthening of your Faith, & the raysinge up the heart of my good sister, which, **I knowe**, hath suffered much discomfort in your longe troubles. (JW to his brother-in-law Thomas Fones; January 29, 1621; RCW1864: 165)

JW Jr. の用法はすべて文中に用いられ, *as far as I know* 2 例, *that I know* 2 例, *wh* 関係詞節内 1 例の計 5 例しかない。*that I know* は JW と異なり文中に生起する。

- (13) [...]: some also say there were some Duchme [n], (wch came wth the Mowhoaks) at that tyme there present, who could not but take notice of those English indeavouring that peace, as likewise ye Mowhoakes themselves there present could not but see the same: wch makes it cleere that the Mowhoaks have no ground, so much as of any suspicion of the English, who likewise never had yet, **yt I know**, any cause yt should move them to mettle wth the Mowhoaks, so much as to speake a word against them, but are ready yet rather to promote their peace, if they have oportunity. (JW Jr. to Thomas Willets; July 27, 1664; MHS1882: 89-90)

Samuel も 3 例 (内 1 例は文末 *for ought I know*) しか生起しない。Fitz-JW には (14) のような二人称主語との共起が 5 例ある。文脈から, 体調を崩した Fitz-JW のことを知った Joseph Dudley の感情に同調していると解釈できる。

- (14) The gentlemen will tell you my indisposition, and being such as your Excellency has felt **I know** you will pittie it. (Fitz-JW to Joseph Dudley ; August 21, 1705; MHS1889: 303)

Wait の文末 4 例は全て (15a) に示す *that I know of* だ。(15b) は, Fitz-JW の後にコネティカット総督に就任した人物に宛てたこの *I know* には主張を強める効果がある。

- (15) a. About disposing of the cattle, I know not which to aduise, more than you know.  
There is no other market but this, **that I know of**. (Wait to Fitz-JW; September 27, 1688; MHS1882: 438)
- b. I am told by one and another of his calling a court to sue the tennants if they were lyable to be sued by him, which **I know** no law of your Government makes them; yet calling such courts is altogether unaccountable, and your Honr and the judges know it is directly contrary both to the common laws and statute laws of England. (Wait to Gurdon Saltonstall; January 23, 1709[-10]; MHS1892: 203)

Margaret の挿入用法は (16) のみ、先妻の子 JW Jr. を *thou* で呼び母としての愛情を示す文脈で、付加情報 *as* 節の中に挿入された *I know* は下線部を強調している。

- (16) I am sory I cannot show my love to thee as I desyre, or expresse my affections as they are, in these fewe lines, but I shall allways retaine a lovinge hart toward thee, & wilbe ready to doe any thinge for thee that is in my power, as **I know thou wilt doe for me.** (Margaret to JW Jr.; [March, 1629[-30]]; RCW1895: 68)

### 5.3 *I hope*

書簡に最も頻出する表現だが表 5 に示すとおり文末にはほとんど用いられない。

JW の挿入用法 25 例のほとんどが等位接続詞後のと *wh* 関係代名詞もしくは *as* の後の文中に用いられるが、主節全体にかかる (17) のような文中例も 2 例生起する。

表 5 挿入用法の生起頻度 (宛先別, 位置別)

<i>I hope</i>	JW	JW Jr.	Samuel	Fitz-JW	Wait	JW FRS	Prof. JW	J. Dudley	Margaret
PL-FA	22	10	9	11	49	2	—	3	10
PL-OT	2	12	—	24	8	2	3	18	—
OL	1	2	—	21	0	0	3	0	—
Total	25	24	9	56	57	4	6	21	10
initial	10	13	3	27	24	1	2	10	6
medial	15	11	6	29	32	3	4	10	3
final	0	0	0	0	1	0	0	1	1

["—"] は対象書簡がないことを示す

- (17) The Lorde our good God will (**I hope**) sende us a happye meetinge againe in his good tyme: Amen. Commende me kindly to my good sister ff: I would have written to her, but I canot, havinge 6: Lettres to write. (JW to Margaret; February 5, 1629;

RCW1864: 373)

Margaret が New England 移住前に書いた JW と JW Jr. 宛の書簡には文中と文末用法がみられる。文中の (18a-b) は挿入される位置が全て異なる。(18b) は読み手の関心を引くかのように会う日の直前に用いられている。文末用法の少ない *I hope* だが、再会を願う文脈に (18c) のように用いられ、同様の用法が孫 Wait の (18d) にもみられる。

- (18) a. We see how the Lord giveth us his warent and daly incoragement that way; wee may **I hope** trust him for a blessinge upon us and ours: [...] the Lord **I hope** hath rowght some good worke in him, which I beseech him to confirme in his due tyme; (Margaret to JW; [October 13, 1629]; RCW1864: 338)
- b. Your horse shal be at London upon Saturday and we shall see you **I hope on tuesday**. (Margaret to JW; [June 13/14, 1627]; RCW1864: 234)
- c. [...] ; we shall al ioyne together **I hope**, and be of one minde, to suffer what God hath layed out for us, and to reioyce together. (Margaret to JW Jr.; [May 17, 1631]; RCW1895: 87)
- d. We shall all meet in Heaven at last, **I hope**; I can say nothing now about anything elce. (Wait to his son JW FRS; September 13, 1714; MHS1892: 300)

JW Jr. には、読み手との距離を縮める呼びかけ語 *Sir*、と共に起する例が 1 例ある。戦争回避のための (19) の願望文は実質的に依頼文である。表書き “To my honored friend, Captains Atherton, At Narogansett.” から敬意のための緩和表現とも解釈できる。

- (19) Sir, **I hope** your wisdome will lead you rather to accept of any reasonable termes of peace then beginne a warre of such doubtfull hazard. (JW Jr. to Humphrey Atherton; November 10, 1650; MHS1882 : 42)

Fitz-JW の 56 例中 43 例は公的な書簡に用いられている。上位階級者宛ての書簡にも下記のような文中用法が見られ、礼を欠く用法ではないことがわかる。

- (20) Your Excllys vigor, accompanied with the dilligence and resolution of the Honble the Council and House of Representatives, will, **I hope**, break the measures of these combined villanes. [...]. (Fitz-JW to The Earl of Bellomont; March 20, 1700[-1]; MHS1882: 379-380)

## 6. おわりに

CWC をもとに一人称単数主語現在形を調査した結果、どの期間も *that/0-that* より挿入用法が多く、男性 New Englanders が女性や Old Englanders (男性) よりも挿入用法を好む傾向にあることがわかった。しかし、共通の表現形は *I think, I know, I hope, I am sure, I see* に限定され、女性は男性に比べ動詞の種類が限定的である分、*I think, I am sure* の 1 万語あたり頻度が男性よりも高い。挿入用法は、接続詞の後や関係詞節内に挿入される例が多いが、*I think, I know (that I know), I hope* の文末用法は、それぞれ Samuel, JW, Margaret の世代以降に見られた。Comment clause 機能は文脈と共起語により異なるが現代英語にみられる機能が 17 世紀アメリカ英語にも確認できた。他の高頻度動詞や Old Englanders 個人との比較調査は今後の課題としたい。

## 引用文献

- Brinton, Laurel J. (1996) *Pragmatic Markers in English: Grammaticalization and Discourse Function*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Brinton, Laurel J. (2008) *The Comment Clause in English: Syntactic Origins and Pragmatic Development*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Fukunaga, Mariko (2020) "Changing Usages of the Auxiliary *Do* as Revealed in the Letters of John Winthrop (1588-1649) and His Male Descendants in the 17th and 18th Centuries," *Studies in Modern English* 36, 1-31.
- 福永真理子 (2022) 「17-18 世紀書簡における挿入用法の変遷」京大英文学会, 京都大学, 2022 年 11 月 12 日.
- Kaltenböck, Gunther (2010) "Pragmatic Functions of Parenthetical *I Think*," in Gunther Kaltenböck, Wiltrud Mihjatsch and Stefan Schneider, eds., *New Approaches to Hedging*, Emerald, Bingley, 236-266.
- Massachusetts Historical Society (1882, 1889, 1892) *Collections of the Massachusetts Historical Society*, The Massachusetts Historical Society, Boston. <https://archive.org/details/collectionsmass20socigoog> [1882, 5th Series, Vol. VIII]; <https://archive.org/details/collectionsmass12socigoog> [1889, 6th series, Vol. III]; <https://archive.org/details/collectionsmass65mass> [1892, 6th Series, Vol. V].
- Mayo, Lawrence Shaw (1948) *The Winthrop Family in America*, The Massachusetts Historical Society, Boston.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- Rissanen, Matti (1991) "On the History of *That/Zero* as Object Clause Links in English," in Karin Aijmer and Bengt Altenberg, eds., *English Corpus Linguistics*, Longman, London, 272-289.
- 田辺春美 (2010) 「15 世紀『パストン家書簡集』における Comment clause について」秋元実治 (編) 『Comment Clause の史的 research —— その機能と発達 ——』英潮社



- フェニックス, 東京, 81-109.
- Thompson, Sandra A. and Anthony Mulac (1991) "A Quantitative Perspective on the Grammaticalization of Epistemic Parentheticals in English," in Elizabeth C. Traugott and Bernd Heine, eds., *Approaches to Grammaticalization*, Vol. 2, John Benjamins, Amsterdam, 313-329.
- Winthrop, Robert C. (1864) *Life and Letters of John Winthrop: Governor of the Massachusetts-Bay Company at Their Emigration to New England, 1630*, Ticknor and Fields, Boston. <https://archive.org/details/lifelettersofjoh00wint>
- Winthrop, Robert C. (1895) *Life and Letters of John Winthrop: From His Embarkation for New England in 1630, with the Charter and Company of the Massachusetts Bay, to His Death in 1649*, Vol. II, 3rd ed., Little, Brown and Company, Boston. <https://archive.org/details/lifelettersofjoh21wint>
- Yamamoto, Shihoko (2010) "The Comment Clause in the *Spectator*," in Merja Kytö, John Scahill, and Harumi Tanabe, eds., *Language Change and Variation from Old English to Late Modern English: A Festschrift for Minoji Akimoto*, Peter Lang, Bern, 375-398.